

遺物

土器

本遺跡から出土した土器は縄文時代前期初頭から晩期後半、続縄文時代の遺物が出土し、その9割以上が後期初頭から前葉の土器であり、次いで続縄文時代の土器である。ここでは後期初頭から十腰内式土器に属する第1群土器の文様の変遷過程及び続縄文時代に属する第2群土器についてそれぞれ述べてみたい。

第1群1類土器から2類土器への変遷過程

本遺跡から検出された第1群1類土器期の竪穴式住居跡内の覆土及びその竪穴式住居跡上面に位置する第2群2類土器期の第2号遺物集中ブロックから出土し、その中でも復元できた土器を中心に層位的な変遷過程を追ってみたい。

竪穴式住居跡床面及び覆土4～5層からは、口頸部文様帯と胴部文様帯が明確に分離し、比較的幅の広い磨消縄文を用いて大柄な渦巻状、コ状文様が施された第1群1類a土器が出土している。この土器は、青森市蛭沢遺跡第3群土器や六ヶ所村沖附(2)遺跡、五戸町中の沢西張遺跡出土土器に類似するものである。

覆土2～3層からは、1類a同様、口頸部文様帯と胴部文様帯が分離しているが、1類aと比較すると口縁部は薄く、幅の狭い磨消縄文による大柄な入組文、入組文を利用した渦巻文が施された第1群1類b土器が出土している。その他、沈線による円形文の壺形土器及び磨消縄文による弓矢をモチーフにしたと思われる文様を施した鉢形土器が出土している。

覆土1層から幅の狭い磨消縄文により、うろこ状の文様が施された第2群2類a土器が出土している。黒石市一ノ渡遺跡、六ヶ所村沖附(1)遺跡、青森市月見野遺跡から出土した土器に類似するものであり、沖附(1)遺跡では磨消縄文による渦巻状、巴状の文様を斜線や弧によって連結したものを、縦に展開するうろこ状、連鎖状の文様が施されたものより古段階に位置づけている。また、覆土1層上面からは、3条一組の沈線による渦巻文が施された第2群2類b土器が出土している。

第2号遺物集中ブロック第3層からは、沈線の両端が連結されたいわゆる輪ゴム状沈線による文様が施された第2群2類d土器が出土している。

第2号遺物集中ブロック第2層からは2条一組の沈線による横位に展開する入組文が施された第2群2類f土器が出土している。

これらの土器を土器型式に充てると、第1群1類a土器は蛭沢群・沖附(2)式に位置づけられ、第2群2類土器は十腰内式に位置づけられるものであり、第1群1類b土器はその間に位置する過渡的なものであろう。

第2群2類土器内においても文様の変遷が見られ、幅の狭い磨消縄文を主に用いた縦位展開の渦巻文様やうろこ状文様が施される2類aが古段階に位置づけられる。ただし、うろこ状文様に関しては磨消縄文よりは、2～3条の沈線により施文されるものが多い。その後、2～3条の沈線による渦巻文が施された2類b、輪ゴム状沈線による文様が施された2類d、横位の沈線による入組文を主体とする2類f土器と続く。

現在、後期初頭から十腰内式までの型式編年は、葛西勲氏、成田滋彦氏らによって細分が試みられほぼ完成しつつある。両者の編年は、土器型式の呼称は異なるものの、大まかな流れはほぼ同じである

が、1カ所異なる点が存在する。

葛西氏は、縄文地に沈線文（蛭沢1群） 蛭沢1群の文様に磨消縄文の要素が加わったもの（蛭沢2群） 磨消縄文による大柄な方形・渦巻文様（蛭沢3群） 十腰内 式という編年をとるのに対し、成田氏は、磨消縄文による大柄な方形・渦巻文様（沖附(2)式） 縄文地に沈線文（弥栄平(2)式） 十腰内 式という、葛西氏の編年を入れ替えて提示している。

本遺跡の竪穴式住居跡およびその覆土から第2号遺物集中ブロックにかけての出土状況をみると、蛭沢3群・沖附(2)式土器の上層からは、縄文地に沈線文が施された土器（蛭沢1、2群・弥栄平(2)式）は出土しておらず、蛭沢3群・沖附(2)式の文様が崩れてきた土器が出土し、さらにその上面から十腰内 式土器が出土していることから葛西氏の編年に近い状況を呈している。ただし、蛭沢3群・沖附(2)式土器期から十腰内 式土器期に時間的な間断が存在したかは、明確に把握することはできなかった。今後の調査により編年を確定していきたい。

第 群土器について

本群土器は、北海道における続縄文文化に伴う土器である。

続縄文時代では、道南地方を中心とする「恵山式土器文化」と道央部を中心とする「江別式・後北式（後期北海道式）土器文化」が広がる。恵山式土器は、東北地方北部の弥生式土器の影響を受け、発展した帯縄文と沈線文を主体とした土器であり、後北式は土着の土器が発展した帯縄文と隆起線文を主体とする土器である。

恵山式土器文化は、後北式土器文化（後北C₁式土器期）の全道的な浸透により、後北式土器文化に吸収される。

恵山式と後北式の共伴関係は、南川 群とアヨロ3類aおよび後北A式、アヨロ3類bと後北B式がそれぞれ共伴関係にあり、前述したとおり後北C₁式は全道的に分布を拡大する。

後北式土器は、東北地方北部を中心に発見例が増加し、南は新潟県での発見例も報告されているが、そのほとんどが後北C₂ - D式土器である。

青森県では恵山式・後北式を出土する遺跡は約50箇所知られている。地域的には下北半島に濃密な分布を示し、また、馬淵川流域、岩木川流域にも分布域が存在し、土器型式は南川 群、後北A～C₂ - D式まで見られるが、C₁式から遺跡数が増え始め、C₂ - D式になり急激に増加する。

続縄文時代後期に位置づけられる恵山、後北式土器文化に伴う各土器型式の特徴は、次のとおりである。なお、各型式ごとの特徴は、「北海道の研究1 考古篇」及び「縄文土器大成 続縄文」を参考にした。

恵山式土器文化

・南川 群、アヨロ3類

沈線で囲まれた帯縄文を胴部上半に波状や山形に描く。（南川 群a、アヨロ3類a）

新しくなると上記の文様帯が崩れ、波形帯が失われ、帯縄文や沈線文が施文される。（南川 群b、アヨロ3類b）



第 123 図 青森県内における続縄文時代の遺跡分布図

後北式土器文化

・後北 A 式

器形は、倒釣鐘形の深鉢形を呈し、底部は上げ底である。体部下半に縦走、上半に横走る帯縄文が施され、列点文や斜行短刻線、沈線文が多用される。口縁は刻みを有する貼付文が2～4条巡る。突起部から垂下する貼付文をもつものもある。

・後北 B 式

上面に刻み目が施された隆起線文（疑縄貼付文）が施される。隆起線が細くなり、刻み目が痕跡となったものが新しい。

・後北 C₁ 式

上面に刻み目のない断面三角形の微隆起線文が複雑に施される。口唇の断面が尖り気味のものが古く、丸み、角形を呈するものが新しい。

・後北 C₂ - D 式

帯縄文による円形、馬蹄形を呈す文様。C₂ 式は帯縄文には隆起線を添わせ、隆起線の省略したものが D 式と呼ばれていたが、最近の調査例から両者の共存は確実視されている。口唇には2～3条の隆起線が巡る。底部は平底になる。

第53表 青森県内出土続縄文式土器一覧

番号	遺跡名	所 在	型 式
1	小 牧 野	青森市野沢字小牧野	南川 群
2	朝 日 山	青森市高田字朝日山	後北A式
3	玉 清 水	青森市駒込字月見野	後北C ₂ - D式
4	小 友	弘前市小友	後北C ₁ 式
5	石 川 長 者 森	弘前市石川字長者森	後北式
6	寺 地	八戸市寺地	後北C ₂ 式
7	塩 入	八戸市新井田字塩入・寺沢・寺窪	後北C ₂ 式
8	檜 館	八戸市是川字檜館・上神田・下神田	後北C ₂ 式
9	田 向	八戸市田向字毘沙門・毘沙門平・松ヶ崎	後北C ₂ 式
10	白 銀	八戸市白銀字大沢平	後北D式
11	三 川 目	三沢市三沢字流平	後北C式
12	小 田 内 沼	三沢市三沢字淋代平	後北C ₂ 式
13	大 曲 海 岸	むつ市田名部字赤川	後北C式
14	関 根	むつ市関根	後北C ₂ 式
15	杉 ノ 沢	浪岡町吉内	後北式
16	松 元	浪岡町本郷松元	後北式
17	鳥 海 山	平賀町沖館字比山館	後北C ₂ - D式
18	神 田	木造町越水字神田	後北C ₁ 式
19	古 館	碓ヶ関村古懸字館ノ平	後北C ₂ 式
20	一本松苗圃A	平内町松野木一本松	後北式
21	馬 門	野辺地町馬門	後北C ₂ 式
22	松ノ木(1)	野辺地町字枇杷野	恵山式末期～後北式初頭

番号	遺跡名	所 在	型 式
23	森 ケ 沢	天間林村天間館字森ヶ沢	後北C ₂ - D式
24	作 田	七戸町字鍛冶林	後北式
25	目 時	三戸町目時	後北D式
26	雷 平	三戸町目時	(後北式)
27	野 月	名川町上名久井字野月	続縄文
28	田 ノ 上	南郷村島守字田ノ上	後北式
29	千 歳 (13)	六ヶ所村倉内家笹崎	後北B・C ₁ 式
30	発茶沢(2)	六ヶ所村鷹架字発茶沢	続縄文
31	上尾駁(2)	六ヶ所村尾駁字上尾駁	恵山B式・南川 群
32	家 ノ 前	六ヶ所村尾駁字家ノ前	後北C ₂ 式
33	弥栄平(4)	六ヶ所村尾駁字上尾駁	後北D式
34	浜 尻 屋	東通村尻屋大平	後北C・D式
35	白 糠 赤 平	東通村白糠字赤平	後北C式
36	銅 屋 (3)	東通村白糠字銅屋・前坂下	恵山ABないしC式
37	大 平 (4)	東通村尻屋字大平	後北C式
38	桑 畑 山 尾 根	東通村尻屋字桑畑山尾根	後北C式
39	外 崎 沢 (1)	脇野沢村小沢字鹿間平	恵山B式
40	九 艘 泊 岩 蔭	脇野沢村脇野沢字源藤城	後北C式
41	貝 崎	脇野沢村脇野沢九艘泊	後北B～C ₁ ・C ₂ 式
42	烏 間	大間町大間字大間平	後北C式
43	大 間	大間町大間字大間	後北C式
44	小奥戸(1)	大間町奥戸字小奥戸	後北C ₂ 式

本遺跡から出土した第 Ⅰ群土器とこれらの土器型式を照合すると、1類は南川 Ⅰ群、アヨロ3類に、2類は後北式に大きく分類できる。

1類を細分すると、1類a、bは南川 Ⅰ群、アヨロ3類に比定されるものと思われるが、第96図288は恵山式土器文化末期の資料である七飯町聖山遺跡から出土したKI群土器に類似するものであり、聖山KI群土器は後北B式に相当すると考えられている。また、1類aは、貼付文はないものの、器形は初期の後北式土器の特徴である倒釣鐘形を呈していることから、恵山式よりは後北A式に比定されるものと思われる。

2類を細分すると、2類aは恵山式と後北式の両方の特徴を有する土器と言える。第98図324は上述した聖山KI群土器及び脇野沢村九艘泊岩陰遺跡出土土器に類似する土器であり、後北BからC₁式に比定されるものと思われる。また、2類bは後北B式に、2類cは後北C₁式に、2類dは後北C₂ - D式にそれぞれ比定されるものと思われる。

本群土器が遺跡地内で作られたものか、搬入品なのかという問題であるが、東北地方で見つかる後北C₂ - D式土器の大半は北海道のものと区別がつかないほど精巧であることから搬入品と考えられている。本遺跡出土土器の胎土分析では、本群土器と第 Ⅰ群土器と分析値が異なり同一地で作られたものではないという結果が報告された(第 Ⅲ章参照)。しかし、隆起線を伴う土器に関しては、基本的な文様要素は類似するものの、文様の組み合わせ方及び製作過程、調整など北海道のものとはかなり異なっているものもあることから、搬入品ではないものがかかなり含まれているものと推定される。

共伴する可能性の強い土器は第 Ⅰ群土器であるが、同一個体の破片6点だけであり、どの型式と併行するかを判断するには、層位的裏付け等、判断材料が不足しており、今後の調査結果を待たねばならない。

(上野 隆博)

石器

調査区内の分布状況について

調査区内から石器が829点と接合資料が3点出土した。この829点のうち、石鏃5点と靴型石器7点および接合資料は縄文時代の石器であり、それ以外は縄文時代後期の石器と考えられる。

ここでは、分布状況について、縄文時代後期の石器を中心に考察を進めることとする。

総出土石器の分布状況をみると、環状列石内からはほとんど出土しておらず、環状列石周縁及び北東部に石器が集中している範囲がみられる。出土数量からみると、1グリッドから10点以上出土している箇所は、環状列石の南側では - D - 4、 - B ~ A - 5、A ~ B - 4グリッド、東側ではL ~ N - 4、P ~ U - 8グリッド、北側ではW - 21、X - 22 ~ 24、V - 39グリッド、北西側ではH - 18グリッドに分布している。V - 39グリッドは縄文時代後期初頭(第 Ⅰ群1類土器期)の捨て場(第1号遺物集中ブロック)、W - 21、X - 22 ~ 24は十腰内 式期(第 Ⅰ群2類土器期)の捨て場(第2号遺物集中ブロック)から出土したものがほとんどである。

以下器種別にみてることとする。

石鏃は82点で、環状列石の南側、東側、第2号遺物集中ブロックから多く出土しているが、環状列石の北西側は皆無の状況である。

スクレイパー類は、出土した石器のなかでも319点と一番多く、総出土点数の約4割を占めており、環